

ジャポネース・ガラランチード

先人たちの「誠実な生き方」

明治維新。それは長く続いた鎖国が解かれ、西洋の文化に積極的に学ぶ方針がとられた時代でした。また、大きな希望を抱いて海外へ移住する人たちが多く現れ始めたころでもあります。

中でもブラジルには、明治四十一年（一九〇八）に最初の移民船「笠戸丸」で七百八十一人が渡って以来、戦前戦後を通じて移住しており、今では約百九十万人ともいわれる海外で最大の日系社会が築かれています。次に紹介するのは、大学卒業後にブラジルへ渡り、造園の仕事に携わってきた日本人男性の話です。

——あるとき、軍の要職に就いていたというブラジル人男性から、自宅に日本庭園を造る仕事を依頼されました。以前から付き合いがあったわけではなく、その仕事を引き受けることで初めて知り合った相手です。庭が完成したとき、男性は「なぜ、あなたに仕事を頼んだか」ということを明かしました。

「子供のころ、私の家は貧しかった。そんな中、近所に住んでいた日本人のおばあさんが私をかわいがってくれて、よく家に遊びに行き、面倒を見てもらった。おばあさんに褒められるとうれしいから勉強に励んだし、世の中のために働くことが大事だと教えてもらったからこそ、ここまで頑張っていることができた。自分の人生を支えてくれたおばあさんの思い出のために、日本庭園を造る人を探して、日本人のあなたを見つけ、庭造りを頼んだのだ」と。(参考Ⅱ丸山康則著『ブラジルに流れる「日本人の心の大河」』モラロジー研究所刊)

ジャポネース・ガランチード。これはブラジルの人たちが「日本人は信頼できる」という意味で用いる言葉です。そうした評価は、このブラジル人男性の思い出の中にあるおばあさんの姿のように、名もなき無数の先人たちの「周囲の人々へ向ける温かいまなざし」や「誠実な生き方」によって、長い時間をかけて形づくられてきたものなのでしょう。